
プロジェクト報告

言語景観データ分析の方法

テキスト・談話・記号

猿橋 順子

1. はじめに

筆者が学部で担当する「言語の多様性と言語政策」と題する講義において、過去数年、第1回目の授業で受講生に「日本社会は多言語化していると思うか」という質問に5段階評価で答えてもらっている。さらに、そう答えた理由を自由記述で書いてもらう。鋭い学生は即座に「多言語化ってなんですか」と質問する。「それをこの講義では考えていきたいので、今はあなたが自由にイメージする多言語社会を前提に答えてみてください」と伝え、とにかく意見を書いてもらう。ここ数年の学生の回答の傾向の変化も実に興味深いのだが、それは別稿に譲るとして、日本社会の多言語化を感じる根拠に多くの学生が挙げるのが駅や道路の標識の日英語併記、あるいは韓国語と中国語を含んだ四言語併記等である。

道を歩いていて自然と視界に入る看板や標識に何が何語でどのように書かれているかは、私たちの社会の言語使用の一面を投影している。あるいは目的をもって訪れた場所の案内や説明書きに、人々は足を止める。複数の言語で書かれている看板を前に、自分にとって馴染みの言語を見出すのは造作ないことである。じっくりと読む言語はひとつであったとしても、最初の一瞥で何種くらいの言語があり、言語による情報量の差の有無や、その位置関係はある程度把握されるだろう。多言語表示は複数の言語話者に意味を伝達するだけでなく、そこに採用された言語とされなかった言語の間、および採用された言語間の当該社会における勢力関係を期せずして表象する。

このように、掲示物はその場において書かれた内容を人々に伝達するだけでなく、時に伝達し損ね、さらには人々の流れや停滞を作り出したり、本来意図していない意味を伝えたりと、さまざまな社会・文化・言語・記号論的な作用をもたらす。

言語景観研究は書き言葉という言語学的な分析を中核にすえながら、近年、その記号的、文化的、社会的意味について探求する新たな展開を見せている。そうした視点の複合性から、方法論上の検討についても議論が活性化している。本論では、言語景観研究の意義を整理した上で、筆者自身による事例研究と、学部生や大学院生による言語景観調査研究の指導を通して浮上したデータ整理および分析上の課題を検討していくこととする。

2. 言語景観分析の意義

言語景観研究 (Linguistic Landscape Studies, LLS) は、専門家が製作する商業価値のあるものから普通の人が作成する手書きの貼り紙のようなものまで幅広く含む、「案内板、道路標識、安全標示、店舗の看板、落書きなどあらゆる種類の公共空間における記述」すなわち「公共に可視な書き言葉」(Blommaert 2013, p.1) を対象とした研究を指す。公共空間に提示される書き言葉の研究は、文字の歴史と同じくらい古くからあるとの指摘もあるが (クルマス 2009)、昨今のこの研究対象への関心の高まりは大量記憶媒体と画像・映像記録とその編集技術が進歩し、簡易化されたことと関連している。言語景観研究によって明らかにできる事柄は、これからも広がることが予見されるが、主に以下が挙げられてきた (Blommaert 2013, 庄司・バックハウス・クルマス 2009)。

1. 特定の共同体および場所における各種言語の存在。その言語間の優勢・劣勢関係や機能分化、言語接触による混淆。
2. 国や共同体の言語政策上の価値観 (たとえば多言語主義か、単一言語主義かなど) が言語使用面と一致しているか、乖離しているかの指標。
3. 国や共同体、地域の識字レベルや書き言葉文化の洞察、文字教育政策の成果測定や妥当性の検証のための資料。
4. 国や地域に横断的に表れる社会変容 (たとえばグローバル化や都市化と過疎化、格差社会化など) を現象的に確認する素材、その兆候や傾向の抽出。

上記は、言語景観研究が接近しうる諸相の一部を列举したに過ぎないが、Blommaert (2009) は、特に近年においては、都市化とグローバル化によって高度に多言語化する場の言語景観データの社会言語学的分析が、社会地理学、都市研究、人類学、普及の社会学の研究者にとっても有用になると述べている。

さらに Blommaert (2009) は、言語景観研究がもたらす社会言語学上の認識転換の

可能性についても指摘する。場と言語の関連に迫る、一見類似した伝統的アプローチに言語地図がある。たとえば方言地図は場という概念を分析枠組みとして活用してきた(c.f. 国立国語研究所 1966-1975, 徳川 1993)。その調査プロセスは、観測地点を定めるものの話者を中心としたものであり、どのような表現をする人が、どこに生活しているのかといった観点に立って地図上に境界線が引かれる。すなわち、場の観念は副次的かつ結果的なものとなる。

一方、言語景観研究は「場」を前景化する。「場」に設置されているテキストが、その場に入出入りする人々にどのような作用を及ぼすのか、あるいは書かれたものが存在する「場」に人々はどのように参加・撤退するのか、包摂・排斥されるのかといった観点である。

すなわち、「誰」がそのような揭示をするのか、誰にそうした揭示を出す正当性や権威が付与されているのか、といったことも言語景観研究の関心事のひとつとなりえるが、同時に発信主体を離れて相互作用するテキストという見方も言語景観研究は提供する。公共空間にあるテキストは、人が作り出し、設置するものであると同時に、設置された途端、発信者の手を離れてそれ自体が人々を管理しはじめる (Blommaert 2013, p.4)。このように考えると、実は管理されるのは情報の受け手だけではないことに気づかされる。この場ではこのような言葉遣いと文字と構成で揭示することが適当であるという規範意識を共有させるという意味において¹⁾、すでに設置されている揭示物は揭示の書き手すらも管理していると考えられるのである。

このような、場が作り出すコミュニケーション秩序について、グローバル化による人の移動を重ね合わせて見た場合、以下のような洞察もある。世界的に人気の高い観光地であるイタリア、ピサの斜塔における事例研究において、Thurlow and Jaworski (2014) は世界各地から来る観光客が瞬時のうちに「公共的文化」(p.469) を共有することに注目している。それはこの観光拠点が自ら演出したり、誘引したりするものも含まれるが、それだけではなく隣接する土産店、ガイドブック、ひいては過去にこの地を旅行した人々が個人的経験として SNS に掲載する記事によって再生産され続ける。多様な言語文化的背景を持つ観光客は、初めてその地に立つものであっても、相互に参照しあい、複合的な談話機能を了解し、その積極的な参加者として談話の再生産に寄与するのである。

Thurlow and Jaworski (2014) はピサの斜塔に実際にある揭示物についても、観光客が一定の行動を取ることを促す一要素としながらも、それによって観光地の運営者が

1) Bourdieu が概念化した言語資本 (“linguistic capital”, Bourdieu 1991, p.51) とそれによって言語使用の適切性が見極められる規範 (habitus) との関連はさらに検討していく余地がある。

観光客を管理するというよりは、観光客が積極的に促しに参加する点に注目している。そして、両者間の相互作用によって観光客独自の行動様式 (“tourist habitus” p.484) が生み出されるとし、それをグローバルコミュニティが生み出す行動様式の一例と捉えている。

Thurlow and Jaworski (2014) の考察において注目すべき点は、情報の発信者と受信者という対峙関係から離れ、両者が共に談話機能を作り出していく相互作用性に着眼したという視点と、行動様式を見る上でテキストを含め、なおかつ談話的、記号論的視点からの分析を含めている点にある。さらに、言語景観研究はそれが前提に掲げている「公共空間」ひいては「公共性」というものはそもそも何なのか、という問いにも戻って来ることが伺える。物理的な空間が政治的、文化的、社会的空間となるとき (Blommaert 2009, p.3) について言語景観研究が示唆しうるのであれば、言語景観研究は公共性についての実証研究の一領域 (Aubin 2014) としても貢献し得るであろう。

3. 先行研究における方法論の検討

このように社会言語学の他の学問分野への貢献可能性という意味において、また社会言語学上の認識論の転換可能性も内包するとされる言語景観研究であるが、その方法論上の検討は端緒についたばかりである (Spolsky 2009, p.75)。

Blommaert (2013) は Backhaus (2007) による東京の言語景観研究 (LLS) を “overwhelmingly quantitative” (p.40) と表現した上で、以下のように指摘する。

Backhaus (2007: 60) pointed out that LLS cannot develop without a clear quantitative corpus and he refers critically to GS [Geosemiotics] in this respect.

(Blommaert 2013, p.40, [] による補足は筆者)

言語景観研究は量的なコーパスなくして発展し得ず、その意味において地理記号論的なアプローチに懐疑的であると指摘している。しかし、この指摘は Backhaus (2007) の論旨に必ずしも沿っていないように見える。

Backhaus (2007) は、自身の研究についての具体的な方法論の検討に入る前に、より基本的な方法論上の問題として、先行研究の中には量的な分析と質的な分析の区別が明確になされていないものも散見されることを指摘している (Backhaus 2007, p.60)。たとえば、質的なアプローチで数量的に限られたデータしか提示していないにもかかわらず、そこから「東京の言語景観では・・・」といった一般化をしてしまったり「日本

語表記が増加している」といった数量的な分析を加えてしまうといった齟齬についてである。質的な言語景観研究のアプローチの一種として、「公共空間の記号論的構成」(“the semiotic construction of the public space” p.60) を明らかにしようとする見方についても列挙した上で、以下のように続けている。

Qualitative approaches generally show little interest in clearly defining the corpus of items their analysis is based on, which is fine as long as a quantitative evaluation of the data is avoided. (Backhaus 2007, p.60)

つまり、質的なアプローチは、一般的に言って、明確に定義づけられたコーパスにあまり関心を寄せていないが、それは量的な評価が行われていなければ問題がない、とし、別の箇所ですべて「言語使用に関する重要な観察」を含んでいると評価もしている。

Backhaus (2007) は言語景観研究が直面する主な方法論上の検討項目として、(1) 調査地、(2) 調査項目、(3) 言語属性の3つを挙げる。そして言語景観データを用いて、書き言葉の実証研究として社会言語学的な傾向を抽出するためには堅実な方法論の検討が必要であると述べている (Backhaus 2007, p.62)。つまり、Backhaus (2007) の主張は、研究設問とデータ収集・整理法、分析・考察までの一貫性と、それを実現するための方法論の検討であり、特定のアプローチやデータ収集法を批判しているようには読み取れない。

Spolsky (2009, p.75) は言語景観研究をめぐる方法論上の見解の不一致について、そもそも「景観」という言語景観研究が冠する術語の定義づけがなされないままにあることに起因すると指摘する。確かに「景観」という以上、全体を俯瞰する視点がどこかに含まれている必要がある²⁾。「景観」というと視覚を伴う概念であるが、公共空間に広く存在する言語という比喩表現であると考えれば、アナウンス放送や音声ガイダンスなどの声、BGMなどの音も含むべきとなるし (Lamarre 2014)、そもそも視覚的にも捉えられるために当初から言語景観研究に加えられている点字は触れられて機能を果たす表記である。このように景観とは何かという問題が言語景観研究ではまだ十分に議論されているとは言い難い。

また、Blommaert (2013) は量的な言語景観研究を、すなわちコーパス研究と同義にみなしているがコーパス以外の量的アプローチも考え得る。質的アプローチの中でも言

2) 「全体を俯瞰」と言った場合、それを個々の表示物の総体と考えれば量的なアプローチとなり、全体的な印象評価や顕著性と捉えれば質的なアプローチが適切ということになる。全体像を捉えることがすなわち量的なアプローチが優先される根拠となるわけではないことを付記しておく。

語的、文脈的、社会文化的と複合的な分析を重ねるために限られたデータしか取り扱えない批判的談話分析でも、特定の深い分析に入る前にテーマ分析などで「談話のマクロ構造」を俯瞰することの重要性を指摘している (van Dijk 2009, p.68)。

このように言語景観研究の方法論上の検討において、量的・質的による二分法だけではなく、さまざまな分析の視座と方法、それらの多岐にわたる組み合わせを考慮する必要がある。問題はどの視座・手法が別の手法よりもより優れているかではなく、問題意識や研究設問、仮説と方法の適切な組み合わせであり、それが分析・考察まで一貫していることにある。複数の視座・手法を比較考察することは、ある特定の視座・手法を選定したことにより、見えにくくなる諸相が必ずあるという研究の限界への気づきにもつながる。たとえば、言語景観データをコーパス化することは、確かに全体を俯瞰するはたらきもあるが顕著性や調和、空間的な関係性、重厚感などは見落とされることになる。

4. 言語景観研究の方法

本節では前節の問題意識に基づき、言語景観データ分析に実際に取り組んだ際に直面した方法論上の検討事項について、具体例を提示しながら検討していくこととする。続く4.1節では言語景観研究の先行研究のなかで、ほとんど検討されていない研究倫理上の課題を取り上げる。続いてデータ整理の段階における主要な枠組みとして、テキスト(コーパス)、談話機能、記号過程の視点をそれぞれ紹介し、一方を選択することで見えにくくなる諸相について相互参照的に論じていくこととする。

4.1 データ収集時の研究倫理上の課題

言語景観調査は、公共空間にある掲示物のデータを収集する。基本的に、現場で収集したデータは持ち帰ってから整理・分析するため、比較的初学者でも訓練を積まずに取り組むという一面もある (Blommaert 2013, p.2)。デジタルカメラの使用が必須ではないが、言語景観研究の広がりや録音・録画およびデータの大量記憶、編集機能の発展と軌を一にしていることはすでに述べた。調査者ではなくても SNS に私的な画像や動画を掲載することが一般化している昨今では、何物を前に足を止めて撮影をしても違和感がなく、調査者にとってはさらに手軽な手法となりつつある。

また実際に研究論文に掲載するのはデータ編集されたテキストや数値で画像自体は事例として数件掲載するにとどまるのが一般的である。これらの諸相が手伝ってか言語景観研究において研究倫理を論じたものは管見の限りほとんど見当たらない。

しかし倫理上の配慮は一貫して取る必要がある。まず、公共空間をいかに定義するかにもよるが、その空間を所轄・管理する組織体が存在することが多い。公共空間の代表的な場所として鉄道駅とその周辺、道路、商店街、公園などが事例として採用されることが多いが、家から一步外に出ればそこは公共空間であるとする考え方もあるし、家の中においてもインターネットでサイバー空間につながれば、もうそこには公共空間が広がっていると見る見方もある。あらゆる場が言語景観調査の場となり得る以上、データ収集上の倫理課題は考慮しておく必要がある。

ネット上はさておき物理的な場所において、自由な写真撮影が許されているような場所においても、所轄する部署が明確でアクセス可能な場合、ひと声かけるなどの配慮をすることが望ましい。それにより掲示物の製作経緯や手順、管理法などの話を聞けることもある。また公共とされる空間にはトイレをはじめ、更衣室、浴場といった私的に仕切られる施設も併設されている。そのような場では周りの人のやり方に倣うという行動様式の共有が行われにくいため言語による伝達が開かれた空間よりも多く、細くなる傾向にある。人の目があるところでは控えられる落書きがなされるのも、そうした暫定的に区切られる空間である。そのため言語景観研究上、興味深い面もあるのだが、これらの場所の撮影はその対象が言語掲示にあったとしても、あまり適切な行為とは受け取られない。不審な行為と受け取られる前に、管理者に調査の趣旨と手法について説明し、了解を得ておくことは、調査者自身の危機管理にもつながる。

大型の商業施設や博物館などでは写真撮影が禁止されていることが少なくない。まず、このような施設で調査をする時にはどの範囲の撮影が禁止されているのかをきちんと確認することが必要である。撮影禁止と入口に掲示されているにもかかわらず、周囲に撮影している人がいたからとデータ収集をしてきてしまったという学生もいるが、このような事態は避けたい。

施設内が撮影禁止となっている理由はさまざまである。その理由に触れることは掲示物の役割や効果、価値などの考察にもつながる。たとえば来場者のプライバシーのために写真撮影が禁止されているのであれば、言語景観の撮影は問題とはならないことになる。ただし通行人が映り込まないような工夫が求められよう。あるいは価格表示のように特定のデータが大量に撮影されることが問題となっている場合もある。問題となる部分をデータから除去することが分析の視点に影響しないのであれば、それを約束した上でデータ収集の許可を得る可能性が出てくる。掲示物そのもののデザイン性や作品として価値があるために保護されている場合もある。撮影が無理であれば手書きで書き写すなど、エスノグラフィーで頻用される手法で代替することもできるし、調査の目的とデータの管理について説明をすれば特別に撮影許可をもらえることも少なくない。

商店街のように個店が立ち並ぶ道路沿いに言語景観データを収集するような場合、全体を統括する管理者が存在しない上に、道路に面する掲示と店内の表示の境目が曖昧であるなどデータ収集法の一貫性を保つ上でも懸案となるような問題が数々生じる。店主の許可を得て万遍なくデータ収集を行えることが理想的だが、決定権をもつ店主がいないなど即時に許可を得られないこともある。店主の写真撮影や調査に対する考え方もそれぞれである。たとえば浅草の仲見世通りなどは言語景観に限らずあらゆる聞き取り調査の対象となるのであろう。多くの店舗に「取材お断り」と表示が掲げられている。それでも調査の可能性について問い合わせるのはいささか勇気の要る行為であるが、取材によって接客時間を割かれることを懸念しているような場合、写真撮影だけならと許可されることもある。いずれにせよ等しくデータ収集への許可と協力が得られるとは言い難く、その経緯は調査の限界として記録するほかはない。

撮影によるデータ収集の考え方は文化によっても大きく異なることが予測される。特に国境を超えた比較調査に取り組むような場合には、それぞれの土地における価値観に十分な配慮をして行わねばならない。また先に Blommaert による「初学者にとっても扱いやすい手法」との指摘を紹介したが、実際に収集されたデータを比較してみると、調査者の言語景観に対する認識を反映してデータにばらつきが見られることは少なくない。特に初学者はその場が主にもつ機能（たとえば公園であれば遊具の利用であるとか、散歩・散策のコースの案内、草木の説明など）には目が行くが、それ以外の機能（たとえば消火栓の設置や迷子のペットを探す張り紙など）は見落とすこともある。書かれた文字という認識から、石に刻まれている文字を見落とすといったことも起こる。一日で済ませてしまうこともできる言語景観のデータ収集であるが、理想的には間を置いて数日間にわたって調査を行う、複数人で調査地に行く場合には、それぞれがデータ収集を行い見比べて自らが無意識のうちにもっていた言語掲示に対する準拠枠を客観視するといった手順を踏むことが望ましい。

4.2 テキスト

次に、収集した画像データをどのように分析可能なデータに整理・編集していくかという問題が生じる。最も基本的な方法としてテキストデータに変換し、コーパスを作成するという手法がある。新聞やウェブ記事、会議録などのコーパスの手法をそのまま援用し得ないのは、その継起順序が一律ではないことに起因する。話し言葉であれば時間軸を継起順序とすることができるし、新聞であれば上から下、左から右といったルールが存在する。看板の空間使用はこうした特定の書き言葉のジャンルが持つルールを必ずしも共有していない。左上から右下に展開されるものもあるが、中心から周縁に向って

配置されるものも少なくない。多言語併記が言語景観調査の主要な研究テーマのひとつとなっていることはすでに述べたが、言語の境界も判断に迷うことがしばしばある。コーパス言語学においても複数言語コーパスの基準設定は重要視されているものの (c.f. McEnery & Hardie 2012), 重層的な言語混合までは想定しておらず, 十全に参照できるほどには精査されていない。以下に言語と表記の観点からこの問題を関連付けていきたい。

4.2.1 言語と表記

言語景観研究が注目されている理由のひとつに, 多言語化する都市の社会言語学的診断をするということがある。たとえばグローバル化の進展に伴う英語化の確認などである。このような問題意識をもった場合, テキストを言語別に区分する必要が生じる。二つの言語が使用される場面で, それが二言語の切り替え (switching) なのか, 借用 (borrowing) なのか, 混用 (mixing) なのかといった問題は話し言葉でもしばしば議論される場所であるが, 書き言葉では表記が絡み, 事態はより複雑となる。

言語と表記の問題の複雑性は Backhaus (2007) が第3点目に掲げた方法論上の検討課題 (言語属性, linguistic properties, Backhaus 2007, pp.61-62) にも検討されている。特に日本語は, 漢字, ひらがな, カタカナ, ローマ字の4種を混用できるために分類が複雑となることが指摘されるが, 同じような問題は日本国内で用いられる日本語以外の言語にも等しく起こり得る。

たとえば筆者が行った新宿区高田馬場界隈のミャンマー料理店を対象とした調査ではミャンマー料理レストランとしながらも少数民族がその民族に特徴的な料理を提供しており, その特性を存在意義としていることが明らかとなった (猿橋 2013)。シャン語やカチン語のようなミャンマー内の少数言語の場合, 独自の文字, ビルマ文字, ローマ字, カタカナと4つの表記法が取り得ることになる。具体例は見出し得なかったが, ひらがなや漢字を充てることも可能であると考えれば, 理論的にはさらに多くの選択肢が存在することになる。言語と表記の切り分けの難しさを以下の例に見てみたい。

図1はシャン州にゆかりのある店主が経営するレストランの看板である。6行からなっている。1行目は店名「ノングインレイ」がカタカナで, 二行目にはビルマ文字で書かれている。ノングインレイは店名を表す固有名詞でもあるが, シャン州で有名な観光地のひとつ, インレイ湖を意味するシャン語である。ビルマ語にすると語順が変わり「インレイカン」となる。言語景観研究では固有名詞の扱いが複雑であるため, これを排除するという立場もある (Backhaus 2007, p.62)。しかし, インレイ湖という実在する地名を表す店名は, 店主とレストランの民族的独自性を凝集させており, 都市におけ

る多文化・多言語の存在を明らかにしようとする言語景観の立場に立てば、これらの語を固有名詞であるからという理由で一律に排除するのは妥当とは言えないだろう。

では、この「ノンゲインレイ」という表記は日本語に分類されるべきか、シャン語に分類されるべきかという問いが生じる。英語について同様の問題が起きた場合、表記がカタカナであることは日本語に組み込まれた外来語（つまり日本語の一部）として扱われる根拠になる。このルールを適用すると2行目に書かれたシャン語の単語もビルマ文字であるがゆえにビルマ語に分類されることになり、データ上、シャン語の存在は記録されないことになってしまう。

続く3行目は「ビルマ シャン料理」と料理の種類が地名と共に日本語で記載されている。本来、4行目に電話番号が書いてあったのだが、上の貼り紙で読むことはできない。貼り紙は薄れて読むことが難しいが辛うじて「ALL LUNCH／ランチ／¥700にしました。」と読める。すべてのランチセットメニューを700円に値下げした、という意味なのだが、「ALL LUNCH」は英語に分類され、以降を日本語に分類することになる。結果として、この看板は、日本語とビルマ語と英語で書かれているという分類になるわけだが、それでは言語の分類をしたというよりは表記（文字）の分類をしたということに近いのではないだろうか。

これとは対照的な事例に Blommaert (2010) の論考がある。Blommaert (2010, p.29) は東京を旅行中にフランス語話者にとっては極めて不適切と感じられるフランス語名の高級菓子店の看板を見つける。よほど印象深い出来事であったのだろう。同様の記録は社会的多様性を研究する Max Planck Institute のウェブサイトにも社会言語学的多様性の一例としても紹介されている(図2)。

その不適切さ以上に Blommaert を印象付けたのは、その店で働く人も、そこを行き交う人々も誰もこの看板について気に留めていない様子であったことにある。その様子から、東京で暮らす多くの人々にとってこの看板は理に適っているものと解釈すべきであり、それはフランス語を言葉としてではなく、フランス語という言語そのものをもつ「洗練」や「お洒落」といった記号論的な解釈によって可能になる、としている。デー



図1：ビルマ，シャンレストランの看板

タを一律にテキスト化しコーパスを構築していくことが言語景観研究に馴染まない一面を例示している。

Blommaert (2010) の指摘は示唆に富むものであるが、図1の「ノンゲインレイ」の事例には適用できない。なぜなら、図2の例は、情報の発信者と（大多数の）受信者の間の相互理解を前提としているが、それは図1には必ずしも当てはまらない



図2：かつて東京にあった菓子店の看板
(Blommaert (n.d.))

からである。ただ通り過ぎていくことを理由に、人々が了解しているとは言い切れない。Spolsky (2009) は言語上の不適切さを直接的に伝えるのは、親が子に、あるいは教師が生徒にといった特定の関係性のみであると指摘している。実際に、留学生が日本にある彼らの郷土料理屋に行った際に「食欲がなくなるようなメニュー表記があった」と報告するのを何度か耳にしたことがある。ほとんどがその不適切な表記について「指摘はしない」と言う。ただ二度とその店に行かないだけだと。聞かれれば答える用意はあるが、聞かれてもいないのに間違いを指摘するのは「上から目線」のようで憚られると言うのである。確かに自分自身を翻ってみても海外で突拍子もない日本語表示を見つけることは度々あるが、写真に撮影して後々の話の種にすることはあっても、店主に話しかけたりなどはしない。

このように見ていくと、書かれたテキストについて言語別に分類しようとするのが、すでに複雑な問題を孕んでおり、そもそも言語の境界はどこに見出し得るのか、という言語学が根源的に持ち続けてきた問いに突き当たる (c.f. Romaine 1994)。特に書き言葉では、表記法という話し言葉の分析では準拠して来なかったところに基準が置かれるという特徴がある。Shohamy (2006, p.20) はもはや従来まで所与としてきた静的な言語単位に分類することの限界を指摘し、言語を名詞ではなく動詞として捉える視点の転換を提案している。いずれにせよ特定の空間で抽出されるテキストデータは、それがあらゆる言語の多様性を含むものであるが故に、明確な言語種区分は難しく、多かれ少なかれ言語の機能や意味、文脈に分け入らなくてはならないことが確認される。

4.2.2 反復

言語景観調査で収集された画像データからコーパスを作成する際に留意すべきもうひとつの点が反復するデータの扱いについてである。公共空間に掲示される書き言葉は、

設置型の重厚感のある看板から紙までその媒体もさまざまである。特に紙で製作されているちらしやポスター、ステッカーの類は、比較的廉価で複製を作成することができる。壁一面に同じポスターが掲示されることもあれば、小さめのポスターについて、他のポスターと同じだけ空間を埋めるために複数が使用されることもある。後者の一例が図3である。



図3：同一のポスターが4枚掲示されている（中央）

あるいは同一のデータが繰り返される場面として、中心となる建物や建造物に到達するための道筋が複数あるような場合がある。どこから人が来ても目的地に到達できるように同一の掲示が異なる道筋に設置されている。あるいは、その場所全体に適応すべきルールが等間隔に配置されているような場合にも同一データの反復が見られる。公園に見る「芝生に入らないでください」などの表示が身近な例である。前者はひとりの来訪者の目には一回しかその情報が届けられないかもしれないが、後者は同じメッセージを何度か繰り返し目にする事になり、来訪者に与える印象にも違いが生じるだろう。

このように反復されるデータはメッセージの強調、他の掲示との空間的な調整、同一場所への案内、広範な空間への周知と異なる機能があり、その機能に応じて配置や分布の仕方が異なるにもかかわらず、それらの情報がコーパスではすべて捨象されてしまうという問題が浮上する。このような問題を解決するためには談話の機能に加え、媒体、場所、間隔、顕著性、調和などの記号論的な諸相を組み込むことが検討されなくてはならない。

4.3 談話機能

言語景観研究が明らかにしようとしている事柄のひとつに多言語の存在と、それらの言語間の優勢・劣勢関係があることはすでに述べた。使用されている言語が多いからと言って、それがすなわち社会の多言語への寛容度や多言語主義的な理念の基盤とみなし

たり、限られた言語しか見られないからといって排外主義の表れと結論づけるのは早急すぎるとの指摘もある（Johnson 2013, pp.88-89）。類似の視点は庄司（2009）の以下の指摘にも通じる。

一般に外国人を対象とする企業，商店の多言語表示は，かれらを客とみなし，購買意欲をさそい，また便宜をはかろうとするものである。しかし，中には，表面的には日本人と同様の注意の喚起をよそおいながら，かれらに対する犯罪予防的警告とみなされる表示もみられる。（庄司 2009, p.29）

多言語の存在と，それぞれの言語に代表されるコミュニティ間の社会的なパワー関係との関連を見ていくためには，言語の種類やコーパス量，その言語間比率，テキストが伝えようとする字義通りの意味だけでなく文脈的な意味，社会文化的な意図，すなわち談話機能にも注目する必要がある。庄司が指摘するように，ある言語の掲示が急激に増えたとしても，それが禁止や警告で占められているならば，それは社会的には統合というよりも排斥という作用の表れとみなし得るかもしれない。

あるいは談話機能による言語景観データの切り分けは，商業的と非商業的，公的と民間といった調査項目の選定（Backhaus 2007, p.61）にも関連する。談話的意味への注目とその複合性について以下の例から考えてみたい。図4は，東京都渋谷区にある明治神宮の原宿駅から神宮橋を渡ってすぐのところにある鳥居の横に設置されている看板である。



図4：明治神宮南参道の入り口に設置されている看板

上記の看板をテキストデータ化すると以下の通りとなる。

定
 一 車馬ヲ乗入ルコト
 一 魚鳥ヲ捕ルコト
 一 竹木ヲ伐ルコト
 右境内ニ於テ禁止ス
 大正九年十一月一日
 明治神宮

「定」と題された看板には、3つの禁止事項が列挙されている。つまり、一義的にこのテキストの談話機能は「禁止」に見える。しかし、これらの禁止事項はいずれも絶対とは言いきれないまでも原宿駅に近い明治神宮で起り得るとは思えない事柄である。この看板には記載日が「大正九年十一月一日」とあり1920年に設置されたものであることが分かる。そこで、一義的には禁止を表す掲示と言えなが、現在の社会文化的な文脈で見ると禁止事項としては不適切であり、むしろ歴史的、文化財的な価値が了解されていると解釈することが妥当となろう。

図4には年月日が明記されているため、こうした談話機能は文脈的にも理解しうる。ところが、神社仏閣に設置されている立て看板には日付が明記されていないことも少なくない。日付が明記されていない場合でも、こうした歴史的、文化財的な価値について同様の解釈が、素材、形状、様式、重厚感、手入れがいかに行き届いているかといった管理の度合いなどの記号論的情報から可能になる。

さらに、図4の看板のすぐ手前に設置されている3つの看板との関係を見ることで、図4の看板が担う別の談話機能が見出される。図5は図4に示した看板の前に設置されている3つの看板である（全体の位置関係については図6を参照）。



図5：図4の前に設置されている3つの看板



図6：図4，図5の看板の位置関係

図5に示した3つの看板にはいずれも禁止項目が列挙されている。禁止事項は、飲食、喫煙から、車の乗り入れ、動物を連れてくること、スポーツをすること、音楽の演奏、物品の販売、募金、勧誘宣伝、文書の配布と多岐にわたる。いずれも「今」の来訪者が行う可能性が予見できる事柄である。

このことから図4の看板は、歴史的、文化財的な価値に加え、ここからが明治神宮の管轄になるという境界の規定、ここから先、来訪者は明治神宮の管理下におかれるのだという権威者の存在の表明を支えているとも言える。歴史的、文化財的な価値は過去の遺産としての価値だが、この看板間の関係から見える場の規定、権威者の表明という機能は今につながっている。談話機能は解釈のための文脈をどこに置くか、記号論的な視座を導入するかどうかによっても見えてくるものが異なることが示唆される。

たとえば、報道の談話研究では、新聞記事はその内容を読者に伝えるだけでなく、語彙選択や文体、強調や焦点化などの言語的な技巧と、記事の組み立て方などが相互補完的に記事を記事らしく演出することに役立ち、それらがニュース価値の再生産を支えているという側面に注目する (Bednarek & Caple, 2014)。ある出来事をどのように切り取って再現すれば報道としての価値が生まれるか、という社会的・文化的な了解によって報道は生み出され、報道を生み出し続けることが、報道はかくあるべきという社会・文化的な了解を強化するという視点である。

同じような観点が言語景観データの談話分析にも言えよう。たとえば、明治神宮に設置される掲示物に書かれたテキストの言語的分析、テキスト間の関係性や、それによって構成される文脈およびその反復や連鎖などは、明治神宮に明治神宮としての独自の価値を生み出す構成要素として分析可能になると考えられる。それは神社あるいは国際的な観光地というより広い談話空間とはどのような関連にあるのかといった新たな問いにもつながる。

4.4 記号過程

これまでテキストと談話機能について論じるなかで、すでに何度か記号論的な視点にも言及が及んだ。記号論的な視座の導入の意義は、先に引用した Blommaert (2010, 2013) や Bednarek and Caple (2014) からも指摘している。談話分析はかねてから複合的な視点を動員することに積極的であったが (Fairclough 2003), 近年ではコーパス分析から記号論的な分析までを広く統合することの必要性からマルチモーダル談話分析という領域も提案されている (c.f. Machin & Mayr 2012)。

先述の Blommaert (2010) が指摘する言語の記号論的解釈を採り入れると (図2参照), 言語景観は見る側にとってまるで馴染みのない言語についても何らかのメッセージを運ぶ, という側面を視野に入れることになる。エスニックレストランと総称される東南・中央アジア, 中東, 南米, アフリカなどにルーツをもつ料理を提供するレストランでは, ルーツに固有の言語が意味伝達というよりは異国情緒を演出するために用いられることがある。英字新聞が店の壁や包装紙のモチーフとして用いられるのも, 洗練さや西洋風を演出する効果を演出しているといえよう。ただしどのような記号論的意味が共有されているかについては, 特に行き交う人々の言語・文化的背景が多様な都市部の言語景観分析では慎重な分析と解釈が必要である。

事例研究を通して浮上した, より解釈幅の少ない記号過程の視点を例示しておきたい。まず複数言語間の位置関係である。物理的な空間に設置される掲示物は, それが複数の言語でなされる場合, 何らかの位置関係を作り出す。たとえば明治神宮の調査では日本語と英語の二種類がある説明書きの看板14点のうち, 左に英語, 右に日本語が配置されているものが7点, 上に日本語, 下に英語が配置されているのが6点, 英語が上で, 日本語が下の位置関係のものが1点であった。掲示物の配置は, 通行者の目線や空間の空き具合, 看板の素材や形状なども勘案して設置されるため, 必ずしも上下の位置関係が設置者の言語に対する優劣意識を表象していると断定することは適当ではない。しかし, それが一定のパターンで繰り返されれば, 目にする側にとって一定の序列関係が印象付けられることも確かであろう。

左右の配置関係は, 日本語は右から左へ縦書き, 英語は左から右へ横書くという, 両言語の表記スタイルにも関係している。日本語は縦書きと横書きの両方を取りうるが, こうした日英語の配置関係は日本語の縦書きが好まれがちな神社ならではの特徴とも考えられよう。また, 一見対訳に見える日・英語の表示が, 内容を見ると対訳になっていないといった事例もあり興味深い。両言語の意味内容にまで踏み込まない来訪者は当然, 自分にとって身近な言語で書かれている事柄の訳が, もう一方の掲示に書かれてい

るはずだと受け取るであろう。テキスト分析では見落とされる記号論的な視座の有用性がこのようなところにも見出し得る。

次に媒体とその素材についてである。言語景観を作り出す媒体には石碑、木材による立て看板、金属板、紙などさまざまである。それは単にメッセージを載せる媒体としてだけではなく、それが掲示物に権威や基盤を付与したり、柔軟性や流動性を示したりする。すなわち、書き言葉の社会的な意味に作用すると考えられる。マルチモーダル談話分析の方法論的な検討を扱った著書と論文の比較検討の中で Constantinou (2005) は、こうした書き言葉を物理的に運ぶ媒体 (media) について、たとえば書き言葉と話し言葉、あるいは言語と非言語の両方を扱う際に用いられる「モード」の概念と重複する側面もあることを指摘した上で、両者を区別し、媒体 (media) をモード (mode) と等しく注目することの重要性を指摘している。

たとえば、博物館や美術館において、書き言葉による説明と相互作用的なやりとりを含むガイドによる巡回説明は、その博物館の社会文化的意味を談話構造に見出そうとするマルチモーダル談話分析の中心となろう。同時に、説明文が何に書かれているのか、アクリル板なのか木版なのか紙なのか、といった媒体の素材面も展示の重厚感や先端性などの印象効果に一役買っていると考えられる。図4の例を改めて見てみたい。文字が書かれている素材は木だが、それだけでなく石造りの土台に据えられ、周囲は木の柵で巡らされ、瓦屋根が施されている。伝統的な和の意匠が用いられていることが、古さ、歴史、遺産などの意味にも結びつき、その文化財的価値を高めることに寄与している。

その他にも記号論的な要素として、書体や文字の大小、色彩、絵や記号との組み合わせ、空間や間の使用、説明書きが実際に指し示す建造物との関係、掲示物が一切ない空間との境界なども含み得る。このように無限に考え得る記号論上の検討項目も含め、言語景観データはいかに整理可能かについて試案を提示し、本論の結論としたい。

5. 結論：言語景観データのマルチモーダル分析³⁾に向けて

言語景観研究は、その研究領域名に「景観」という総体を示す語が入っていることか

3) 言語景観データの分析においてテキスト、談話、記号という3つの異なる視点を融合あるいは相互参照することの意義を論じる本稿は、既述のマルチモーダル談話分析や (Machin & Mayr 2012), Nexus analysis から地理記号論を経てマルチモーダル分析へと発展させている Scollon & Scollon の流れに沿っており (Scollon 2015), 方法論的にはマルチモーダル分析への貢献に類するものと位置付けるのが適当と考える。ただし、主に量と質の研究法を融合させる「ミックス法」(抱井・稲葉 2011) との深い関連も類推される。マルチモーダル分析とミックス法との方法論的関連については今後の検討課題とする。

ら、質的なアプローチに先駆けて量的なアプローチを取るべきだという指摘もある。しかし、等しく重要なことは言語景観を何と定義し、そこから何を見出そうとするのかによってデータの整理方法も分析上の記述、解釈も変わり得ることを確認し、どこに照準を合わせるかを検討する手順を堅実に踏むということである。大量記憶媒体と情報処理技術の発展に伴い、大量データの蓄積と、地域間および経年比較のための汎用性あるデータ整理は多くの研究者が抱く理想であるが、少なくとも言語景観研究においてはその検討が端緒についたところと言わざるを得ない。

本論では言語景観データの収集と整理の段階について、これまであまり論じられてこなかった研究倫理の問題と、データ整理におけるテキスト（コーパス）、談話機能、記号過程それぞれの視点の有用性と欠点、相互補完の可能性について論じた。どの観点を取ったとしてもそれによって見えにくくなる側面は存在するし、複合的な視点によって確認される事象もあった。また、いずれの観点においても量的と質的なアプローチの組み合わせは考えられ、言語景観研究において質か量かといった二者択一的な議論は必ずしも馴染まない。

さて、問題はデータ量において膨大である上に、その分析の視点も多様な言語景観データについていかに効率よくデータ整理を行い得るかという問題である。テキストデータ化するコーパスについてもデータ単位の設定が幾通りか考えられ見解の分かれるところである。同時に談話および記号論的なデータ整理を行う際には、それぞれの分析の視点によりデータの切片が異なるという問題が浮かび上がる。

マルチモーダル分析が等しく抱えるこうした問題にこたえるソフトウェアも開発がなされている。一例として NVivo (Bazeley & Jackso 2013) は画像データにコーディングを行うことも可能なため、写真について揭示物と揭示物の間の空間にコーディングするなど可能である。画像とテキストを関連付けることもできるため、元データにすぐに戻ることができるなどの強みもある。コーパス分析から記号論的解釈まで、どちらに重点を置くかによって複数の整理法が可能で使いやすい。コーパスを主とする場合には記号論的解釈事項についてはアノテーションとして格納でき、記号論的分析を主とする場合には画像を基盤としてテキストデータをノードに組み込むことができる。一方、弱点もある。NVivo は英語版に加え、日本語版も開発されているが、言語設定を予めする必要がある。このため複数言語コーパスの分析にはあまり適していない。やはりコーパス分析の面においては、それぞれの言語コミュニティ内の言語学者らによって開発されたソフトウェアがより洗練されており言語間比較や複数の言語を同時に格納できる複数言語コーパスのためのソフトウェア開発はこれからも発展していく余地が多いにある。

すなわち、言語景観データの分析には複合的な見方が相互補完的に取り得、その整理方法はソフトウェアの開発と、それを使いこなすスキルの習得とが同時進行で進んでいると言える。その意味では Blommaert (2013, p.2) の「初学者でも比較的簡単に取り組める」という指摘は留保する必要があるかもしれない。一方で、筆者が担当する演習の中で、渋谷駅を調査地とした学生グループは、多言語表示を始め多機能が搭載された券売機は、券売機の並びの中央に配置されているのに対し、切符の買い方に自信のない外国人観光客は列の端の券売機に行く傾向があり、その結果、多言語表示が日本語に不慣れな外国人に届きにくいという問題を発見した (佐藤・小原・五月女・櫻田・林・今井 2015, p.14)。これは言語景観と人の動きの関連というマルチモーダル分析によってこそ得られる気づきでもある。

このように言語景観データの分析には引き続き議論していく研究法上の問題が多々あるものの、多言語化・グローバル化する社会が等しく経験する社会言語学的変化への気づきと問題への対処法も見出し得る研究分野と期待されよう。

引用文献

- Aubin, F. (2014). Between public space(s) and public sphere(s): An assessment of Francophone contributions. *Canadian Journal of Communication* 39, 89-116.
- Backhaus, P. (2007). *Linguistic landscapes: A comparative study of urban multilingualism in Tokyo*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Bazeley, P. & Jackson, K. (2013). *Qualitative data analysis with NVivo*. (2nd edn). London: Sage.
- Bednerek, M. & Caple, H. (2014). Why do news values matter? Towards a new methodological framework for analyzing news discourse in Critical Discourse Analysis and beyond. *Discourse & Society*. 25(2), 135-158.
- Blommaert, J. (2010). *The sociolinguistics of globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blommaert, J. (2013). *Ethnography, superdiversity and linguistic landscapes*. Bristol: Multilingual Matters.
- Blommaert, J. (n.d.) Annotated pictures - Nina's derrière. Retrieved Aug. 30, 2015 from <http://www.mmg.mpg.de/subsites/sociolinguistic-diversities/annotated-pictures/ninas-derriere/>
- Bourdieu, P. (1991) The production and reproduction of legitimate language. In John B. Thompson (Ed.) *Language and symbolic power*. (G. Raymond & M. Adamson Trans.) Cambridge: Polity Press. pp.43-65. (Original work published 1982).
- Constantinou, O. (2005). Multimodal Discourse Analysis: Media, modes and technologies. *Journal of Sociolinguistics*. 9(4), 602-618.
- クルマス, F. (2009). 「言語景観と公共圏の起源」 庄司博史, P. バックハウス, F. クルマス (編著) 『日本の言語景観』 三元社, pp.79-94.
- Fairclough, N. (2003). *Analysing discourse: textual analysis for social research*. London: Routledge.
- Johnson, D. C. (2013). *Language policy*. Hampshire: Palgrave.
- 抱井尚子, 稲葉光行 (2011) 「ミックス法」『コミュニケーション研究法』 ナカニシヤ出版, pp.199-

213.

- 国立国語研究所 (編) (1966-1975). 『日本言語地図』 大蔵省印刷局
- Lamarre, P. (2014). Bilingual winks and bilingual wordplay in Montreal's linguistic landscape. *International Journal of the Sociology of Language* 228, 131-151.
- Machin, D. & Mayr, A. (2012). *How to do Critical Discourse Analysis: A multimodal introduction*. London: Sage.
- McEnery, T. & Hardie, A. (2012). *Corpus linguistics: Method, theory and practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Romaine, S. (1994). *Language in society: An introduction to sociolinguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- 佐藤美野里, 小原春花, 五月女航, 櫻田祥子, 林佑香, 今井健太 (2015) 「迷える外国人観光客から見た渋谷駅: アクションリサーチを通して」青山学院大学国際政治経済学部猿橋順子研究室. (unpublished research report).
- 猿橋順子 (2013). 「エスニックビジネスにおける言語管理とエンパワメント: 高田馬場界隈のビルマレストランを事例として」『青山国際政経論集』 89, 99-125.
- Scollon, S. W. (2015) From mediated discourse and nexus analysis to geosemiotics: A personal account. In S. Norris & C. D. Maier (eds.) *Interactions, images and text: A reader in multimodality*. Boston: Walter de Gruyter. pp.7-12.
- Shohamy, E., (2006). *Language policy: Hidden agendas and new approaches*. Oxon: Routledge.
- 庄司博史 (2009). 「多言語化と言語景観: 言語景観からなにがみえるか」庄司博史, P. バックハウス, F. クルマス (編著) 『日本の言語景観』 三元社 pp.17-52.
- 庄司博史, P. バックハウス, F. クルマス (編著) (2009). 『日本の言語景観』 三元社.
- Spolsky, B. (2009). *Language Management*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Thurlow, C. & Jawarski, A. (2014). "Two hundred ninety-four": Remediation and multimodal performance in tourist placemaking. *Journal of Sociolinguistics* 18(4), 459-494.
- 徳川宗賢 (1993). 『方言地理学の展開』 ひつじ書房.
- van Dijk, T. A. (2009). Critical discourse studies: a sociocognitive approach. In R. Wodak & M. Meyer (Eds.) *Methods for Critical Discourse Analysis*. London: Sage. pp.62-86.